

人間関係の理解と 心理臨床

家庭・園・学校・施設・職場の
問題解決のために

【編著】

吉川晴美・松井知子

はじめに

今日、家庭・学校・職場はもとより、幼稚園・保育園・施設などで、様々な人間関係の問題が山積し複雑化している。このようななか、私たちが人として、生きがいをもち、より幸せに、健康に生活していくためには、人間関係が特に重要な役割を果たすと考える。本書はこのことをまず明らかにすることを第一の目的とする。

心理や教育の臨床に携わる者は、クライアント（来談者）や生徒が抱える様々な問題に臨むとき、悩む人に誠実に寄り添い、信頼的人間関係を築くこと、問題状況の解決・発展を促し、ひいては人としての生活の質を高め、生涯の発達の可能性を広げていくための対応・援助が求められる。このような高い専門性を発揮するには、問題の状況を深く洞察する力と様々な角度から多面的にとらえる視点、そして具体的に実現するための理論と方法と実践を学び、絶えず練磨していくことが必要とされる。

そこで本書は、生活の現場において、個人や集団の抱える悩みや問題の解決に携わる方々、臨床心理士、教師、保育士、看護師などが専門職として求められる基本的な考え（理論）・方法（技法）・実践（事例）について著している。

第1章のねらいは、人間関係とは何かを明らかにすることである。

私たちは、状況における関係的存在である。関係学を創始した松村康平は「人は関係的存在である」と定義し、意識するにしろしないにしろ、誰でも、今この状況・場において、人とかかわり、物とかかわり、自己とかかわり、毎日生活しているとす。すなわち、私たちが抱える悩み・問題は、実際に今生活しているこの状況との関係において起こっているからである。

第2章では、人間関係を生涯発達の視点から解説していく。

人は誰でも、子どもとして親から生まれ、人生の初期には、特定の人（あるいは人たち）との極めて密接な身体的・心理的・社会的なかかわりのなかで生存が可能になり、それを基盤として、人としての高度で複雑な発達がなされていく。人生の諸時期における発達課題や問題を解決し、人生をより豊

かにしていくことはもちろんであるが、それに大きな影響を与えるものとして、各発達段階における人間関係の危機と課題をまず理解し、そこからかわっていくことが重要だからである。

第3章と第4章では、実践・臨床経験の豊富な著者らが挙げた様々な事例から現場支援の実際と方法を学ぶことをねらいとしている。乳幼児健診、児童養護施設、小・中・高校・大学などの学校で起こる問題、電話相談での事例などであり、どれも臨床活動で実際に役立つように解説した。心理劇の手法を用いて問題の解決を導く事例が多いのは特色である。

特に第4章では、精神科クリニックにおける発達障害者への復職支援を取り上げた。発達障害、発達の著しい凹凸などをどうとらえ、そこから派生する心理的問題にどう対応・援助していくか、心理臨床においても大きな課題となっている。社会に出てから、人間関係の構築が難しく、生きにくさ・社会生活が困難になっているからである。

なお、本書に掲載したこれらの事例は、当然のことながら、事例の特性を保持しつつも個人が特定されないよう倫理的配慮のもとに改変を行っている。

最後の5章では、人間関係力アップの研修の方法を紹介する。日常生活の人間関係の問題を解決していく能力のアップのために、心理劇（サイコドラマ）、カウンセリング、リラクゼーション等による研鑽方法を示している。

本書が、心理臨床の専門職を目指す学生はもとより、心理・教育の現場ですでに活動している心理職者、さらには施設・園・学校などの指導者や保育者、教師などの日々の営みの一助になれば幸いである。

最後に、事例の掲載にあたり、ご協力いただいたたくさんの方々、そして、誠意をもって強力にご尽力とバックアップをいただいた慶應義塾大学出版会編集部・西岡利延子氏に深く感謝申し上げます。

2017年9月

吉川晴美

目次

はじめに iii

第1章 なぜ人間関係なのか

第1節 人間関係の意味と重要性	2
(1) 人間関係とは何か	2
(2) 人間関係の意味	5
(3) 人間関係に関する先行研究	7
(4) 関係的存在としての私たち：人間関係の捉え方	10
(5) 人間関係と心理臨床	12
第2節 現代社会における人間関係から起こる諸問題 ——健康づくりの視点から、発達段階における人間関係を考える	15
(1) 発達段階（ライフステージ）と人間関係	15
(2) 健康づくりの視点からの発達段階と人間関係	19
(3) 生涯発達と発達課題について	20
(4) マズローの欲求階層論	23

第2章 人間関係の発達と心理臨床

第1節 心理臨床の理論と方法	28
(1) 心理臨床とは	28
(2) 心理臨床における問題の捉え方とかかわり方	28
(3) 各心理臨床の理論と方法の特色	30
1 フロイトの精神分析	31
(1) 心的装置	31
(2) リビドー発達論	33
(3) マーラーの分離・個体化理論	33
(4) 精神分析的な心理療法	35

- 2 ユングの分析心理学と心の構造 38
 - (1) コМПレックスと元型 39
 - (2) ユングのパーソナリティ理論 40
- 3 ロジャーズの人間性心理学 42
 - (1) 中核三条件 43
 - (2) 来談者中心療法 (CCT) から人間中心療法 (PCA) へ 45
- 4 行動療法および認知療法・認知行動療法 47
 - (1) 行動療法 48
 - (2) 認知療法・認知行動療法 53
- 5 関係状況療法 56
 - (1) 関係学の視点と関係状況療法 56
 - (2) 関係状況におけるかかわり構造 57
 - (3) 三者関係的把握と展開について 60
 - (4) 関係状況療法にかかわるセラピストとしての基本的要件 62
- 6 心理劇の特色と方法 65

第2節 人間関係の生涯発達 68

- (1) 人間関係の発達とは 68
- (2) 人間関係の生涯発達の諸段階 69
- 1 胎児期の人間関係の発達 71
- 2 新生児期～乳児期の人間関係の発達 72
 - (1) 発達の基盤 72
 - (2) 新生児期の人間関係の発達 73
 - (3) 乳児期の人間関係の発達 73
- 3 幼児期の人間関係の発達 82
 - (1) 幼児期前期 (1～3歳) の人間関係の発達 82
 - (2) 幼児期前期から後期への転換期 (2～3歳) の人間関係の発達 84
 - (3) 幼児期後期 (4～6歳) の人間関係の発達 85
- 4 学童期の人間関係の発達 87
 - (1) 学童期の発達課題 87
 - (2) 学童期の子どもの心理臨床的な問題と対応 88
 - (3) 小学校における心理劇の展開：新学習指導要領から 91
- 5 青年期における人間関係の発達 95
 - (1) 内部・外部生活環境とのかかわりとメンタル状況 95
 - (2) 外部環境としての社会経済的状況 96
 - (3) キャリア構築と人間関係 98

- 6 成人期における人間関係 100
 - (1) 労働・職場環境とのかかわりと人間関係 100
 - (2) 家庭における親子関係の役割変化 103
- 7 老年期（高齢期）における人間関係 105
 - (1) 老年期とは 105
 - (2) 超高齢社会 106
 - (3) 高齢者の生活満足感と人とのつながり 106
 - (4) 喪失とQOL 107

第3章 現場支援の事例に学ぶ

事例紹介にあたって 110

- 第1節 言葉の遅れに悩む母親——1歳6カ月児健診での事例 111
 - (1) 概要 111
 - (2) アセスメント：見立てと方針 112
 - (3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果 113
- 第2節 こだわりが強く発達障害かと悩む母親——3歳児健診での事例 116
 - (1) 概要 116
 - (2) アセスメント：見立てと方針 116
 - (3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果 118
 - (4) 考察（第1節・第2節） 119
- 第3節 不登校から自発的登校へ——小学生の事例 121
 - (1) 概要 121
 - (2) アセスメント：見立てと方針 121
 - (3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果 122
 - (4) 考察 124
- 第4節 児童養護施設で暮らす子の人間関係の再構築——中学生の事例 125
 - (1) 概要 125
 - (2) アセスメント：見立てと方針 125
 - (3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果 126
 - (4) 考察 130
- 第5節 「空気が読めない」生徒がいるクラス集団への対応——高校生の事例 132
 - (1) 概要 132
 - (2) アセスメント：見立てと方針 132
 - (3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果 133
 - (4) 考察 137

第 6 節	娘の不登校問題を通して自らの生き方を問い直す母親——電話相談の事例	142
	(1) 概要	142
	(2) アセスメント：見立てと方針	142
	(3) 臨床活動（電話相談）の経過と内容：特色と効果	142
	(4) 考察	144
第 7 節	アイデンティティ未確立の学生が自己回復へ——大学生の事例	146
	(1) 概要	146
	(2) アセスメント：見立てと方針	146
	(3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果	147
	(4) 考察	150
第 8 節	コミュニケーションスキル不足の若者の人間関係構築——新入社員の事例	152
	(1) 概要	152
	(2) アセスメント：見立てと方針	152
	(3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果	153
	(4) 考察	154
第 9 節	わが子とのかかわりに悩み、子育てを通して新たな役割モデルの獲得へ——被虐待体験をもつ母親の事例	157
	(1) 概要	157
	(2) アセスメント：見立てと方針	158
	(3) 臨床活動の経過と内容：特色と効果	160
	(4) 考察	163

第 4 章 成人発達障害と人間関係形成

第 1 節	発達障害と医療リワーク（復職支援）	166
	(1) 発達障害者への医療リワークでの支援	167
	(2) 当院での支援	168
第 2 節	ASD 者への医療リワークプログラム：MCP	173
	(1) Mutual Communication Program (MCP) について	173
	(2) MCP の事例	180
	(3) MCP の効果と考察	183
	(4) 今後の課題	186
第 3 節	サイコドラマを用いた ASD 者の治療	189
	(1) 概要	189
	(2) A 氏が主役となったサイコドラマとその後の経過	190
	(3) 考察	193

第5章 人間関係力アップのための訓練・トレーニング方法

第1節	心理劇（行為法）を通して	200
1	心理劇の技法：基本	200
	(1) ローリングテクニック（物媒介人間関係発展の技法）	201
	(2) 集団状況における自己定位安定・役割取得行為促進の技法	202
	(3) 3人一組の心理劇	203
	(4) 補助自我による自己確立を促すエゴビルディングの技法	204
2	家族の問題・課題を解決する力を育む心理劇	206
	(1) ウォーミングアップの心理劇「1、2、3の創作体操」	206
	(2) 問題・課題を設定する	207
	(3) 考察	209
3	「観技（状況関係認知）」の体験により、多様な観方・かかわり方に気づく	212
	(1) 観技とは	212
	(2) 考察	215
第2節	傾聴スキル、自己カウンセリング	217
1	「傾聴スキル」のトレーニング	217
	(1) 「傾聴」とは何か	217
	(2) 「傾聴」の目的	218
	(3) 「傾聴」スキルのトレーニング：ロールプレイ	218
2	「自己カウンセリング」を応用したトレーニング	222
	(1) Work 1 「かけがえのない私」	222
	(2) Work 2 「自分会議」	224
第3節	臨床動作法、漸進性弛緩法	226
	(1) ストレスとは	226
	(2) 臨床動作法	227
	(3) 漸進性弛緩法	228
	おわりに	230
	キーワード索引	231
	著者紹介	236

第 1 章

なぜ人間関係なのか



第1節 人間関係の意味と重要性

(1) 人間関係とは何か

1) 今日の間関係の危機

私たちは様々な人間関係のなかで生活しており、経験する人間関係のありようは、今日の私たちを取り巻く環境や社会からも大きな影響を受けている。

特に発達途上にある子どもにおいて、生涯にわたり人格形成に中核的な役割を果たすのは人間関係である。子どもは身近な人との密接なかかわりを仲立ちとして、周囲の環境に働きかけ、自分と人と物との関係を、身体や感覚を通して体験、認識し成長する存在である。

今日、子どもたちの周りには、手間暇かけずに簡単に使用できる便利な物があふれ、パソコン、スマホなどが駆使されるネット社会のなかで生活している。自己と便利な物との関係のみで完結できる機会が増え、リアルな人間関係を必要としない場面が増えている。周囲の親や大人世代においても、孤立化、閉塞化が進み、多様で柔軟な人間関係を結んでいくことが苦手な人が増えている。

家庭（家族や夫婦、親子）、学校、園、施設（教師や保育者、子ども同士、保護者）、職場（上司、部下、同僚など）での人間関係において様々な問題（ストレス、ハラスメント、DV、引きこもり、不登校、虐待、いじめ、子育て不安など）が噴出しており、今すぐの対応が求められている。

ここでは、様々な人間関係の本質や状況、様相の理解を深めるために、まず、身近な人間関係から考えていこう。

2) 人間関係の捉え方

すべての悩み、問題は、直接的間接的に何らかの人間関係が関係しているといえる。次の事例から考えてみよう。

〈事例1〉育児に悩む母親

ある乳幼児健診の心理相談の場で、疲れきった様子の母親から次のような相談があった。

「現在、3カ月児と2歳児の子どもを育てています。最近とても疲れているのによく眠れず、朝起きると肩が異常にこっていて頭痛が治まらず、疲労感、不安感が強いんです。病院に行って診てもらったら『あなたひとりで育児を頑張っていますね。ご主人には助けてもらっていますか?』と聞かれて、いつも仕事で忙しい夫にはいつのまにか育児を期待せず、ひとりで歯を食いしばって頑張っている自分に気づき、涙がでてきました。夜睡眠をとるときにも、心身ともにリラックスできないことが身体に症状として、表れてきたことが分かりました。医者には初期の産後うつ病の兆候もあると言われました」

この母親の関係状況（特に夫、子どもたちとの関係）、ひとりで頑張っている母親の複雑な自己の状態（子どもを可愛いと思えない自責の念、よい母親像と現実の自分とのズレ、不安・怒り・焦り・孤独感などを含む）があり、とりあえず通院を続けるとともに、それと並行して、保健センターでの個別的な育児相談（カウンセリング）、子育て支援のための親子参加の小グループでの活動が紹介された。

あなたがこの〈事例1〉のような話を、知人から相談されたとき、どのように捉え、受けとめ、応答していくであろうか。話す人の傍らに座り、その人の当惑したまなざし、息づかい、気持ち、声のトーンを感じつつ、話を傾聴（第5章第2節1を参照）（相手の話を相手を感じたこととしてそのままに受けとめながら話を聴くことを）し、相手の気持ちを察して頷いたり、一緒にどう

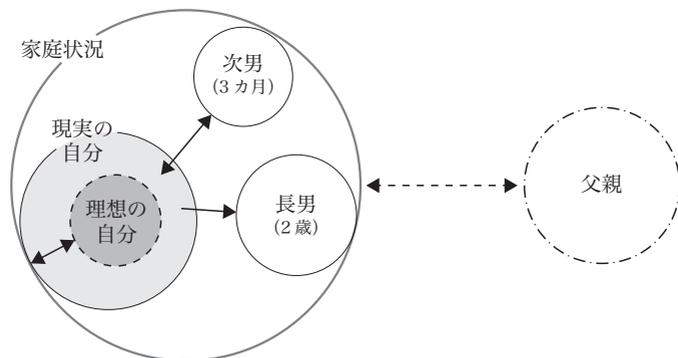


図 1-1-1 〈事例 1〉の人間関係

したらよいか考えたりして、少しでもその人の悩みを軽くしようと試みるであろうか。

図1-1-1は、事例の人間関係の状況や様相を図形で表したものである。相手の話を聴く場合、その経過や内容についてより具体的に理解する方法として、具体的な場面をイメージし、そのかかわり合いを図に表現する方法がある。

このように、ことばで表された出来事を視覚的に表現すると、全体的な関係状況を捉えやすい。事象にまつわる人間関係を捉えるときに、話の内容から捉えていく方法もあるが、まずはその具体的な場面から、人間関係の在り様を視覚的に表し、問題を多面的に捉え、感じ・気づくことから始めると、今ここから、先に向けての問題設定、明らかにしていきたい課題（テーマ）、解決への手がかりのひとつになるであろう。

演習 1 「私の人間関係」を描く

- ① A4かB4サイズ程度の白紙を用意する。
- ② 自分の日頃の人間関係を思い浮かべ、関係している人物を挙げてみる。例：
母、父、妹、兄、大学の友達AとB、サークルの部長C、仲間DとE、アルバイト先の店長、先輩、仲間……など。

- ③自分自身また、自分が挙げた各々の人物について、折り紙、広告紙、切り抜き可能な雑誌、などを使い、A4～B4判の用紙に収まる程度の大きさ、好きな形に切り抜く。
- ④白紙の用紙の中央に切り抜いた自分を置く。そこは固定し、自分とかかわる他の人物については、自分との関係を考慮しながら適当だと思われる場所に置き、また置きながら距離を調節し、相互の関係を線の太さ、→などで表す。
- ⑤全体的に相互の関係を確認し、できたらノリで貼って固定し完成。
- ⑥完成した自分の人間関係の図(図1-1-2)から、現在の自分の人間関係について分析、考察する。
- ⑦さらに、「1年後の自分の人間関係」と題してつくり、未来の人間関係への発展、改善点、方法などを考えてもよい。

(2) 人間関係の意味

私たちが日常的に用いている「人間関係」という言葉の意味は何だろうか。

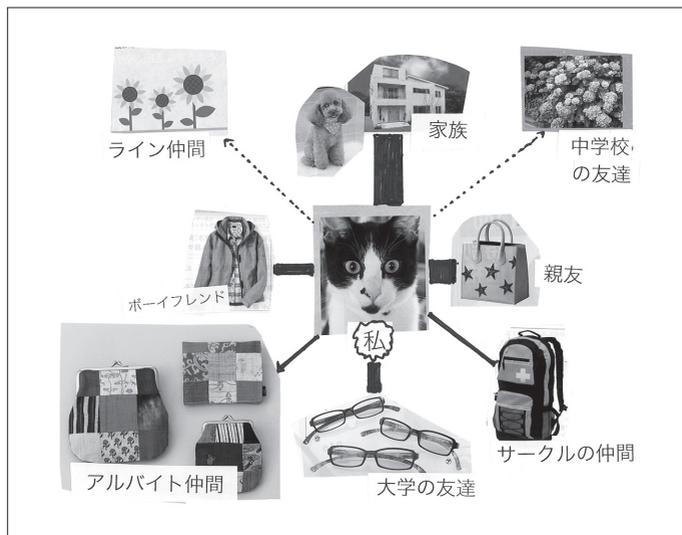


図 1-1-2 「私の人間関係」の作成例

辞書で調べてみると、「社会や集団における人と人とのつきあい。感情的な対応を含む個人と個人との関係」（『広辞苑』、2008）、「集団を構成する人間のつくり出す力動的な関係」「仕事を進めていくときに必要な関係の円滑化の機能」（『日本国語大辞典』、2006）とある。人間関係は、社会や集団、仕事において成立し、その関係は力動的に変化し、人間の感情的、心理的な対応を含むということを意味する。また、その円滑化の機能が課題とされていることが分かる。

それでは、「人間関係」についての研究はどのように進展してきたのであろうか。例えば、乳児について、その社会的知覚、対人行動の発達においてもすでに胎児期からの発達と深く関連し、誕生時から大変意味ある有能な存在であるということが、今日までの数々の研究成果により実証されている。しかし、それはほんの数十年前には考えられなかったことであり、「乳児はそれ以前には研究者の関心もひかなかったし、研究方法も発達しなかったと考えられる」（川上、1989）。

人間関係についての科学的な研究の端緒は、人間としての権利、人間らしい生き方が探求されるようになり、「児童の世紀の到来」と言われた20世紀を待たなければならない。さて、それにしても、このあまりにも日常的に繰り返られる「人間関係」について、科学的な研究は可能なのだろうか。

日常の生々しい人間関係を研究の対象とするとき、学問が客観的であろうとしても、人間関係の主観を排除することはできない。早坂泰次郎（1923-2001）は、主観か客観かという対立軸で見るのではなく、「対象のあるがままを正確にとらえる」視点を提供している。そして「なまなましい人間関係の現場からの問いかけや訴えに対して適切に応答しうるためには」「関係の先験性に根ざした〈臨床の知〉としての学として成立するであろう」（早坂、1991）と述べている。

松村康平（1917-2003）は1960年代には、すでに臨床心理学、関係論の立場から、人間関係について論及している。人間関係という対象の性質から、人間科学として、その理論・方法・実践を相即的・関連的に研究し、解明し

ていくことを提唱する。その姿勢は、科学としての客観的解明を目指すと同時に、きわめて人間尊重の立場であり、それは実践即研究のなかで、また、人間研究には、臨床的、教育的、倫理的配慮が必要でもある。

人間関係が成立する関係状況には、必ず、自己・人・物との関係が同時的に含まれ、研究者（指導者）自身もそこに人として参与し関係的に存在しているのである。したがって、研究者（指導者）はどのようなかわり方をしているかを意識化（明確化）し、共に担う関係状況の人間関係の発展を志向し、研究（指導）を行う関係責任がある。関係状況で起こる人間関係を事実にくすくすして（ありのままに）認識、洞察し、その本質や関係発展の構造、機能、方法を解明、明確化することを目指しているといえよう。

今日において、社会や家庭、職場、学校や幼稚園、保育園、施設などで、様々な人間関係の問題が山積し、複雑化しているといえる。これらのことをふまえ、本章では、今、なぜ「人間関係」かについて、人間関係に関する先行研究をたどり、次に、現代社会にみられる人間関係を述べていく。

(3) 人間関係に関する先行研究

人間関係の意義や重要性にかかわる論説、研究をたどってみると、「児童の世紀」とされた20世紀の初頭から半ば頃にかけて、盛んになってきたことが分かる。

1890～1900年代において、発達の初期における親子関係が、おとなになっての精神生活に大きな影響をもたらすことを最初に述べたのは精神分析を創始したフロイト（Freud, S. 1856–1939）である。フロイトが生物的視点からリビドーの発達についての幼児期体験の重要性を述べたが、その後、新フロイト派として、フロム（Fromm, E. 1900–1980）は、人間行動理解に、所属する社会構造との関係も取り入れなければならないこと、またサリヴァン（Sullivan, H.S. 1892–1949）は乳児期における母親とのコミュニケーションに着目するなど、精神医学を対人関係の学とし、人間行動の真の理解は「関与しながらの観察」でしか得られないとした。

子どもの人間関係に関するものとして、クーリー（Cooley, C.H. 1864-1929）の研究がある。クーリーは、20世紀初頭に、社会学の視点から、家族や遊びの集団のように、対面的で親密な、一体感のある人間関係が特徴である集団を一次的集団とした。このような人間関係が成立する一次的集団は、子どもにとって、社会の基本的価値を内面化するための、人格形成の苗床として重要な意義があるとしている。

では、いわゆる「人間関係論」の台頭はどのように起こったのか。メイヨ－（Mayo, G.E. 1880-1949）は、1924～32年にかけて、シカゴの家庭用電気機械器具を生産していたホーソン工場において実験を行った。生産性の向上には物理的な環境条件に一義的に規定されるのではなく、集団の一員として認められたり、仲間とうまくやっていきたいという社会的欲求に規定されること、すなわち、会社によってつくられた公式集団よりも、彼ら自身によってつくられた非公式集団の仲間やリーダーとの相互関係に規定されることが明らかになった。このことは、経営におけるその後の人間関係論に大きな影響を与えた。

では、人間関係を二者関係、三者関係、集団関係としてみなしていく研究や方法は、どのように展開してきたのか。

モレノ（Moreno, J.L. 1889-1974）は、精神科医であった。精神病や心身症を対人関係の障害とみなし、自ら創始したサイコドラマを、対人関係の集団心理療法とした。サイコドラマは自発性に基づく劇的表現を用いる。また、集団内の人間関係の測定のために、ソシオメトリーの方法も考案した。モレノは、人と人の出会い、そこに相互選択、相互作用が生じることを「テレ」と名づけ、サイコドラマの方法により、人間関係の治療を行った。

レヴィン（Lewin, K. 1890-1947）は、グループダイナミクス（集団力学）の立場から、集団の構造と機能に及ぼすリーダーの影響（リーダーシップの型）について実験を行った。個別的に、また全体に向けての説明・説得よりも、小集団による討議で決定・実行していくことが、一番効果的であった。その小集団法は、対面的で盛んな相互作用が期待されるという。

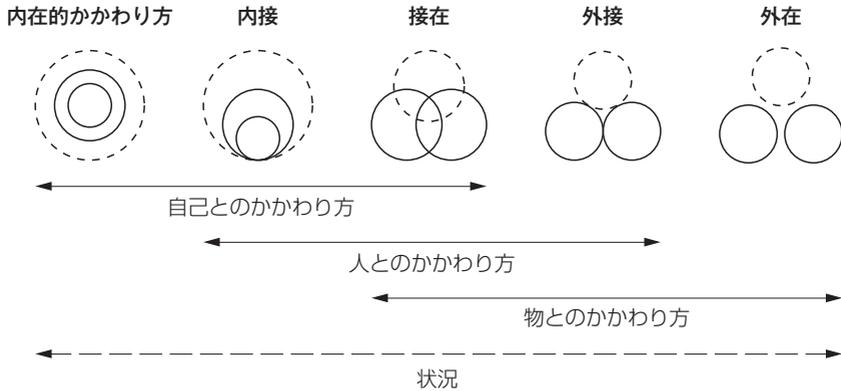
ハイダー (Heider, F. 1896-1988) は、バランス理論において、対人関係の二者関係あるいは三者関係における感情、認知の生起についてモデルを提供し、不均衡な関係から均衡な関係へと変化することを示した。

三隅二不二 (1924-2002) はPM理論により集団のリーダーシップを説明する枠組みを提起した。集団機能は、課題解決あるいは目的達成に関する機能 (Performance function) と、集団の存続や維持の機能 (Maintenance function) があり、リーダーシップがこの2つの機能をどのように満たしているかによってリーダーシップの類型化を行った。

松村康平は、モレノの創始したサイコドラマを心理劇として日本への導入に力を尽くしたひとりである。心理劇のねらいについて、「今、ここで、新しくふるまうことが重視される。自発的、創造的にふるまうことのできる人間形成がめざされる。心理劇では、そこに成立している対人関係が発展し、そのことにおいて関係の担い手としての個人が伸び、その個人が伸びることが対人関係を発展させるという体験、その体験を豊かにすることができる方向へ、周囲の状況を変革していく。その意欲が関係体験を通して育ち、それを実現する態度が、今ここで、あたらしくとれるようにする」(松村、1961) と述べている。

松村は、人間は関係的存在と定義し、特に子どもは、著しく関係的な存在であるとし、子ども理解において人間関係的把握の重要性を唱えた。また、人間関係のタイプを一者関係型、二者関係型、三者関係型と類型化し、三者関係型の人間関係が、関係発展の通路や質を飛躍的に拡大、転換するものとした。人間関係は自己と人との関係であるが、そこに、物との関係も含まれ、同時に関係状況が成立しており、この、自己・人・物との関係状況において人間関係を捉え、関係の発展を促していくことが必要であるとした。

この、自己・人・物・状況とのかかわり方には、5つ (あるいは7つ) のかかわり方 (図1-1-3) があり、接在的かかわり方が成立する状況 (接在共存状況) がもたらされていく過程が重要であるとした。また、集団の機能には、方向性機能、内容性機能、関係性機能があるとした。これらの3つの機能が



内在的かかわり方：ぴったり一体的なかかわり方（演者的）
 内接的かかわり方：内から支え合っているかかわり方（補助自我的）
 接在的かかわり方：相互に交流し合い、共に状況をつくるかかわり（監督的）
 外接的かかわり方：外側から事実在即して見、捉えるかかわり方（観客的）
 外在的かかわり方：離れて独自にかかわるかかわり方（舞台的）
 出典：松村康平（1991）より。

図 1-1-3 5つのかかわり方

集団活動において十分に機能するような指導によって、個人と集団全体の相即的な発展がもたらされるのである。

(4) 関係的存在としての私たち：人間関係の捉え方

私たちは、今、そして刻々変化する状況における関係的存在である。松村は「人は関係的存在である」と定義し、意識する・しないにしろ、誰でも、今ここの状況・場において、人とかかわり、物とかかわり、自己とかかわり、毎日、生活しているとする。私たちが抱える悩み、問題は、実際に今生活しているこの状況との関係において起こっている。

〈事例2〉不登校を主訴とする子ども

「子どもが学校に行かない」「朝起きようとするとき身体が硬直する」「朝、学校に行くときお腹が痛くなる」との主訴で親が来談する。

この場合、「関係」という視点からは、次のように捉えられる。

登校場面における子どもの内面や親の内面、身体については、「自己との関係」である。不安や緊張、怒りを感じる心理的な自己、同時に、硬直したり、お腹が痛いと表現される身体的な自己との関係である。

「物との関係」とは、住まい、学校、通学路、学校への持ち物、連絡帳、筆箱、ノート、教科書、食事、衣服、ゲーム、好きな物、自然などの様々なもの、物的環境との関係である。また、学校や家庭での様々なルールや宿題やテストなど、勝手に変えられない、誰もが従わなければならない物的な性質をもつものは、「物との関係」に対応する。「人との関係」は、親やきょうだいなどの家族、近隣や親戚の人、学校の教師、友達、カウンセラーとの関係があてはまる。

これらの「自己との関係」「人との関係」「物との関係」は、二者、三者、また多者、集団関係など、様々な様態があるが、私たちが、健やかに、生きがいをもって、生活、成長していくためには、自己・人・物との関係が多様に、また相互にかかわって、発展していけるような状況がつくられていくことが重要である。

〈事例2〉の「不登校」という主訴からは、

①現在の子どもにかかわる様々な自己・人・物の関係状況から「問題」が起こっていると捉え、②その問題の所在は、「人との関係」——担任の教師や友達との関係、親や家族との関係なのか、「物との関係」——体罰やいじめ、規律などの厳しい雰囲気醸し出している学校や教室などの場との関係なのか、座席や学習課題との関係なのか、「自己との関係」——子ども自身の不安な気持ちや身体的病気などとの関係なのか、③さらにこれらが複合的に影響し合っているのか、関係における問題として多面的に捉え、その関係に働きかけ、関係の調整・変革・発展が図られていくことが大切である。

演習2 「5つのかかわり方」

下記の場面について、あなたが保育者だとすればどのようにかわるか。ま